共生を考える

神崎中学校二年　椿　大和

友だちに伯父の紹介をするとき、「僕の伯父は、障がいをもっているんだ。」と何のためらいもなく話をする。それは、私の家ではごく自然な事であり、自慢の伯父のことを隠す必要がないと思って育ってきたからだ。

今から五十年ほど前、伯父が祖母のおなかの中にいたとき、祖母は体調を壊してしまったそうだ。医師からは、「何らかの障がいをもって生まれてくる確率が高いです。産むのであれば、それだけは覚悟しておいてください。」と告げられたという。悩んだ末、せっかく授かった命を大切にしたいと考えた祖母は、伯父を出産する事にしたそうだ。

伯父は、視力・聴力などに障がいをもってこの世に生まれてきた。お盆やお正月に私の家に遊びに来てくれた時、写真やプラモデルを見てもらおうとしたら、目の前までもっていかないと見えないらしかった。

このような伯父の幼少期はというと、目が見え、耳がいい普通の子どもたちと同じように、走ったり笑ったり、時には泣いたりして、楽しい生活を送っていたそうだ。伯父の弟にあたる私の父は、「兄とけんかをしたら、俺より力がうんと強くてね。いつも負けてばっかりだったよ。」と話してくれた。それは祖父と祖母が、伯父のことを「障がいがあるからと特別扱いするのではなく他の子どもたちと同じように育てていたからではないかと思う。「危ないからダメ」ではなく、挑戦させ、見守りながら、できる事を増やしていったのだと思う。

一方で、祖父や祖母は、伯父を普通の小学校に入学させるのがよいのか、それとも支援してくれる学校に入学させた方がよいのか、かなり悩んだそうだ。今でこそ、障がいをもっている人への関心や理解が高くなっているが、その当時は、世間ではなかなか理解されなかったからだ。小中学校や図書館などの公共施設や、レストランなどでは、いわゆるバリアフリーというシステムを導入しているところはほとんどなかったそうだ。まして、私の住む神崎町のような田舎の小中学校には、車いす用のスロープやトイレ、町には点字ブロックやエレベーターなどの施設は、当然のことながら、導入されていなかったのだ。そのため、伯父は、四街道にある盲学校（小等部）への入学となった。小学校入学時といえば、まだ幼く、親に甘えたい時期なのに、通学する事が難しかったので、盲学校の寮で過ごしたそうだ。月曜日の朝、学校に送っていき、平日の夜は寮で過ごし、金曜の夜に迎えに行く、という生活を送っていたのだ。この六年間は、寂しい思いをしたことだろう。その伯父も、中学生になると、一人で電車に乗って通学できるようになり、自宅からの通学となった。

伯父は、どんな時にも陰で支えてくれた両親（祖父・祖母）に恩返しをしたいと思ったそうだ。だから、目が悪くても、耳が悪くてもできる職業に就こうと、目標をもって必死に勉強して、マッサージ師になった。現在は鍼灸師の資格も取り、マッサージ店を経営している。今ではたくさんのお客さんが訪れ、忙しい毎日を送り、とても幸せな生活を送っている。

最近、テレビや新聞などでよく目にする言葉がある。「差別」や「いじめ」などだ。それは、障がいをもっている人へのものも少なくない。なぜそのような対応をするのだろうか。障がいをもっている人も、私たち健常者と同じ人間であり、同じように目標をもって生活をしているというのに、そのような人たちを馬鹿にするような言葉、汚すような発言や行動をとる人たちがいることに、大きな憤りを感じる。「守ってあげる」のではなく、相手が望むのであれば「手をさしのべる」ことのできる一人でありたいと思う。確かに、私の伯父は視聴覚障がいをもっている。だから、少し苦手なところはあるかもしれない。しかし、その分根気強くてとても優しい。

東京オリンピック、パラリンピックを来年度に控えている日本。最高の「おもてなし」ができるよう、私たち一人一人の心の中から「差別」に対する考えをなくしていかなければならない。「同じ」と「平等」は、少し違うように思う。「平等」になるように、みんなで少しずつフォローし合っていくことが大切なのではないかと思う。そうすれば「同じ」になるのではないかと思う。必要以上のことをする必要はない。特別扱いもしなくてよいのだ。周りの私たちが障がいをもった人について理解を示し、困っていたらさりげなく手をさしのべることができれば、障がいをもっている人たちも、もっと社会進出ができるようになるのではないかと思う。私の住む町にも、点字ブロックや駅にスロープ、車いす用のトイレなど、障がいをもった人たちも暮らしやすい環境が整えられている。あとは、私たちの気持ちだ。きれいごとではなく、心の底から共生をめざしていきたいと思う。